三芳ブルーの歩みをたどる

江戸から明治にかけて、三芳で生産されていた藍。人々の生活を彩った鮮やかな色は、どのように作られていたのでしょうか。資料や文化財で当時の様子をたどります。

【写真】歴史民俗資料館敷地内に移築復元されている旧池上家住宅。当時の一般的な住宅に比べてかなり大きく、藍屋の商売で財をなしたと言われています。

藍染めのギモン ?

埼玉のどこで藍が作られていたの？

埼玉県内の主な藍葉生産地（明治時代）

『武蔵国郡村誌』をもとに作成

埼玉の藍は「武州藍」

明治時代の埼玉県では利根川流域の本庄・深谷・妻沼地域と、荒川流域の川島・吉見地域・川越・所沢地域での生産がさかんで「武州藍」と呼ばれていました。

藍♥埼玉

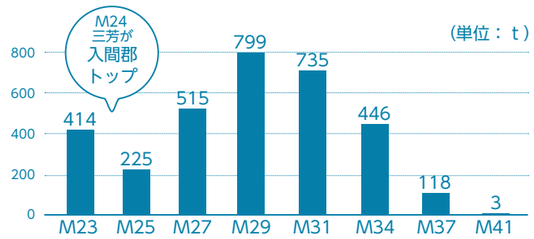
明治前期の藍生産ランキング

- 1位 徳島県
- **2位 埼玉県**
- 3位 福岡県

明治前期の埼玉県の藍生産量は全国でなんと2位でした。1位の徳島県の藍は現在でも「阿波藍」として有名です。

【参考】『内國統計全書』吾妻健三郎編 東陽堂 1884年

入間郡の藍収穫量



江戸から明治時代の一大ブームに乗り、三芳でも盛んに行われた藍の生産。ピーク時には年間約85tの生産量で入間郡トップに踊り出ました。そんな三芳の藍はどのように作られていたのでしょうか。

三芳の藍づくり

当時の三芳には染め物をする紺屋が4軒あり、村の各地では農家が藍を栽培していました。収穫した藍葉を買い取ったのは藍屋を営む人々です。竹間沢と上富に1軒ずつあった藍屋では、農業のかたわら藍葉の加工を行い、主に所沢方面へ出荷していました。

そのうちの1軒である竹間沢の旧池上家では、藍葉の加工を行い、染料の藍玉を生産していました。現在その住宅は、歴史民俗資料館敷地内に移築復元され、当時の面影を見ることができます。

巨大な藍ビジネス

当時大きな市場だった藍。池上家は藍玉の売り上げで財を成したことから「藍大尽（あいだいじん）」と呼ばれていました。

近代日本経済の父として知られる渋沢栄一も、十代の頃に藍づくりに励み、経済人としての第一歩を踏み出しました。

人々の生活に根付き、一大ビジネスとなっていた藍ですが、ここで大きな転機が訪れます。

合成藍への転換

年々増加していた藍の生産量は明治30年頃をピークに激減します。その背景には、明治36年頃に海外から簡単に濃く染まる合成藍（インディゴピュア）の本格的な輸入が開始されたことです。安価で大量生産が可能な合成藍の普及で、手間のかかる天然藍は価格が暴落し、各地の藍産業は衰退の一途をたどります。三芳でもかつての藍畑や藍屋、紺屋は姿を消していきました。

時代の波に乗り現れ、消えていった三芳の藍産業。当時の藍色を現代に蘇らせ、語り継ごうとする活動が行われているのをご存じですか？次のページでは活動に関わる人とその想いを紹介します。

上：上富にあった藍屋。当時は上富と竹間沢に1軒ずつあり、染料の藍玉を生産していました。/ 左下：甕（かめ）の中で藍を建（た）てる（色素を水に溶かす）ことで、藍染め液ができ、鮮やかな藍色に染まります。/ 右下：消防半纏や野良着、糸束など様々なものが染められていました。

藍の鬼瓦。家のシンボルとしての役割もあり、当時の人々と藍の関係の深さが伺えます。

Topics 渋沢栄一のルーツ 藍玉ビジネス

渋沢栄一が生まれた家でも藍の栽培や買い付けを行い、藍玉を作っていました。10代にして長野や群馬の紺屋まで営業に行ったり、番付表で藍農家のやる気を上げる仕組みを作るなど、当時から実業家の才能が光っていました。

【参考】渋沢栄一デジタルミュージアム「11. 藍と栄一」

昔ながらの 藍染めのしかた

その1 染料をつくる

藍葉を乾燥・発酵させた染料を作ります。これを丸めて乾燥したのが藍玉です。

その2 藍染め液をつくる

甕（かめ）の中に藍玉と灰汁などを入れて1週間ほど発酵させ、藍染め液を作る。

その3 布に模様をつける

布を縛ったり、縫ったりしてから染めると、模様をつけることができます。

その4 布を染める

布を藍染め液に浸す。空気に触れると青くなり、繰り返すと深い藍色になります。

その5 洗って干して完成

好きな色になったら、水洗いして干して完成。色止めをすると色落ちしにくい。

Point いろいろな染め方

現在では化学薬品を使って発酵させる方法もあります。また、生の藍葉でも染めることができ、葉を揉んだ汁で染めたり、葉をそのまま布の上にのせて叩く方法もあります。